ウォーターゲート

スパイと大統領の物語

朝日新聞外報部

ウォーターゲート

記者と大統領の物語

朝日新聞外報部

ウォーターゲート　　定価 550 円

発行日／昭和 48 年 7 月 25 日　第 1 刷

著　者／朝日新聞外報部

発行者／岡 見　　章

印刷所／凸 版 印 刷

発行所／朝日新聞社 東京 大阪 名古屋 北九州

© 朝日新聞社 1973

0031—254162—0042

この物語に現れる挿話は現実のものである。
登場人物も、場所も、すべて実在する。
また彼らの言動は、実際の報道と証言にもとづいている。

目次

一　その日……1
ガードマンの発見　2　最初の特ダネ　5
絶頂から谷底へ　9　広がる衝撃　11
二　ウォーターゲート・セブン……19
ねらった獲物　20　ホワイトハウスの影　27
ミスターX　32
三　当局は関知しない……39
開かれた金庫　40　盗聴時代　48
CIAを引きこめ　58
四　陰謀の根……73
長官室の密議　74　汚いカネ　83
〝隠密〟政治　95　氷山の一角　102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五　民主党の敗退……109
マイアミの熱気　110　スパイの腕前　116
〝消去〟された候補者　124　ニクソン圧勝　132
六　ワシントン・ポスト張り切る……141
二人の特捜班　142　相つぐ特ダネ　147
政府との闘い　152　勝利の栄冠　157
七　乱れる足並み……165
旅客機墜落のナゾ　166　工作員ハント　172
マッコードの意地　179
八　〝裏切り〟のすすめ……187
裁判長のファイト　188　しのび寄る謀略　193
なぜ自分だけが――　197　水門ついに決壊　200

九　揺れるホワイトハウス……209
「重大な進展」210　ディーンの反乱 215
トカゲのしっぽ 223
一〇　ニクソン開き直る……233
ワニの涙 234　まぼろしの「ディーン報告」 239
伝家の宝刀を抜く 249
一一　第七の危機……261
守りより攻め 262　ゆがんだ忠誠心 274
一二　コーカス・ルーム……281
政治ドラマの開幕 282　七人の侍 289
一三　大統領指弾さる……303
ガンが増殖して 304　政敵のリスト 313
歴史に残るとき 319

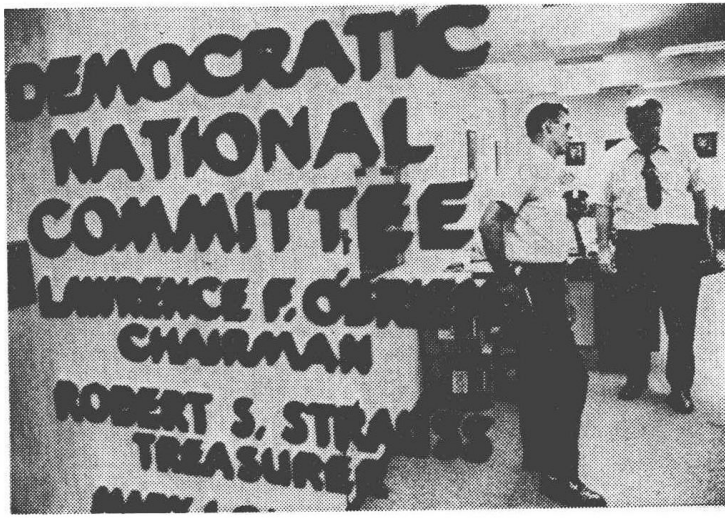
ウォーターゲート人名録……321
年表……329
あとがき……353

一　その日

creep　(ネコなどが)こそこそはい歩く。忍び足で歩く。～in　忍びこむ。～out（秘密が）洩れる。

——新英和大辞典（研究社）

〔写真〕スパイ五人は，ウォーターゲート・ビルにあるこの民主党全国委本部に侵入，逮捕された。



ガードマンの発見

六月十七日、土曜日、午前二時。

〝南部〟に位置する米国の首都、ワシントンはもう真夏だ。いつもなら、昼間の熱気がこもって蒸し暑いはずなのに、この夜は寒冷前線の影響で涼しかった。気温二十二度。湿っぽい空気にまじって、どこかから花の香りが漂ってくる。

「よりによって週末の夜勤に当たるとは。でも今夜は涼しくて助かる」。フランク・ウィルズにとって、週末であることを除けば、この夜もまた、いつもと変わらぬなんの変哲もない夜になりそうだった。

ジョージア州サバンナ生まれの二十四歳の黒人青年、ウィルズはゼネラル警備保障会社のガードマンである。一年ほど前、ワシントン見物に来てここが気に入り、そのまま住みついた。職業紹介会社の世話で、警備保障会社に就職した。「犯罪に興味をもっていたから」。いずれはFBIかシークレット・サービスにつとめ、秘密工作員になるのが彼の夢だった。しかしいまは週給八十ドル。生活は楽ではない。

彼の見回りの持ち場、ウォーターゲート・ビルは複雑に入り組んだシルエットを、ポトマック河畔

の暗い空に浮かび上がらせていた。防犯のため、夜中、電灯をつけっ放しにしておくオフィスも多い。もうこの時間、暗いワシントンの町にほとんど人通りはない。同じビルの中のアパートの灯もひとつひとつ消えだした。豪華なアパートに住む政財界のお歴々の週末のパーティーも、そろそろ閉会の時刻なのだろう。

ウィルズの持ち場はアパート、ホテル、事務所などがあるウォーターゲート・ビルの事務所ビル、地下から十一階までだ。午前零時から七時まで一人で見回る。いま、彼は外部からビルの各階に通ずるドアをひと通り調べ終えて地下室に来た。

——と、彼の足がとまる。地下二階のガレージから階段に通ずるドアが、ノブを回すとすっと開いたのだ。ガレージからの泥棒の侵入を防ぐため、自動的にしまって外からは開かないようになるドアのラッチが、ビニールテープでおさえてあった。自動錠がかからないように。

「どこかの事務所に荷物を運びこんだ連中がテープをはがし忘れたのだろう。しようがないやつらだ」。ウィルズはテープをはがした。この行為が、その後全米を揺り動かした「ウォーターゲート事件」の封印を切ることであったとは、その時、ウィルズの知るよしもなかった。

午前二時二十分。リーパー巡査部長の率いるワシントン首都警察特別捜査隊の私服刑事三人は、下町で窃盗事件を捜査中だった。「ウォーターゲートで侵入事件発生。直ちに急行せよ」と無線で

川越図書館蔵書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

指令がはいる。

ラッチがテープでとめられているのを発見したウィルズが、いったん、道を隔てたハワード・ジョンソン・モーテルのコーヒーショップで一服したあと、十分後、念のためもう一度点検に戻った時、一度はがしたテープがまた元通りにはられていたのだった。疑いの余地はない。なにものかがビルの中にいる。しかも、このドアを出入りしているのだ。ウィルズが警察に電話で通報するまで一分とはかからなかった。

現場に到着したパトカーの三人の刑事は、まずウィルズに「最近盗難のあった階は？」と聞いた。

「六階と八階。では八階から調べよう」

八階に異常はなかった。ピストルを手にかまえた三人は、非常階段を下へ降りていく。

六階。全部で二十九室のオフィスを、民主党全国委員会本部が借り切っている。廊下に通ずるガラスのドアは、錠があいていた。右手奥の事務室にピストル片手の刑事がはいった時、机のうしろから一人の男が立ち上がった。高く上げた両手には、指紋を残さないよう外科手術用の白いゴム手袋をはめている。つづいて四人の男が次つぎに姿を見せた。

「撃たないでくれ。おれたちは、もうつかまったんだ」。五人のうちの一人がいった。

最初の特ダネ

その朝八時半、ワシントン郊外にある「ワシントン・ポスト」の首都部長バリー・サスマンの家の電話が鳴った。眠い目をこすりながら受話器をとり上げたサスマンの耳にとびこんできたのは、ハリー・ローゼンフェルド首都圏版部長からの意外な知らせだった。

「けさ、ウォーターゲートの民主党本部に忍びこみがあった」とローゼンフェルドはいった。「知らせておいた方がいいと思って」

これはただの事務所荒らしの泥棒じゃない――サスマンの頭にはピンとくるものがあった。「すぐ出社する」

土曜日の朝、編集局は手薄だった。出社したサスマン部長は、とりあえずそのへんにいた早出の記者を物色した。眠そうな目をした長髪の若い男が、だらしない服装をしてぼんやりバージニア州版のデスクにすわっている。

カール・バーンスタイン。二十九歳。ワシントン・ポスト紙にはいって六年にもなるのに、これといった記事を書いたことがない。市役所の記者室で昼寝をしているところをデスクにみつかってからは、「できないやつだ」という評判が固まりかけていた。「あいつで大丈夫かな」――サスマン

の頭に不安がよぎる。しかし、ほかに人はいない。ともかく五人の被疑者の身元を洗えと命じて取材に出す。

もう一人、ボブ・ウッドワード記者を自宅から呼びだす。三十歳。これまた敏腕で鳴る男ではない。一度ポストの入社試験に失敗して、郊外の小さな新聞につとめたあと引き抜かれた男。入社してまだ九カ月にしかならない。だが、仕事の熱心さだけは買われている。顔を出したとたんに、バーンスタインの後を追わせる。

こうして、ウッドワード＝バーンスタインのコンビが偶然にできた。のちに、二人の共同取材記事は通称〝ウッドスタイン〟の署名入りで紙上を飾り、その特ダネにつぐ特ダネは、競争紙やホワイトハウスの背筋を寒からしめ、ついにはワシントン・ポストに七三年度ピュリツァー賞公共奉仕報道部門賞をもたらすことになる。その新人コンビの誕生だった。

「民主党事務所盗聴はかり、五人逮捕」

翌十八日付ワシントン・ポスト紙の第一面には、三段抜きの大見出しが躍っている。〝ウッドスタイン〟の取材した記事の内容はこうだ。

「十七日午前二時半、五人の男が逮捕された。警察当局によると、五人はワシントンの民主党全国委員会を盗聴するための周到な計画に従事していた。うち一人は、中央情報局（CIA）職員と自

称している」

「五人はバージニア街二六〇〇番地ウォーターゲート・ビルの、民主党全国委が全室を占める六階の事務室で、ピストルをつきつけた私服警官によって逮捕された」

「五人の被疑者がなぜ民主党本部事務所の盗聴をねらったのか、五人は他の個人または組織のために働いていたのか――などの点について、いまのところ説明はされていない……」

記事の署名は、アルフレッド・ルイス記者とはなっているが、文末に「この記事は、ボブ・ウッドワード、カール・バーンスタイン、バート・バーンズ……らの協力による」と九人の記者の名前が挙がっている。ワシントン・ポスト紙が最初から本腰を入れて、この事件に取り組む姿勢を示していたことがわかる。新聞の中の方のページには、お手柄のガードマン、ウィルズの話ものっている。ウィルズはのちに新聞、雑誌、テレビの記者に追い回され、職場を変えたあげく一回につき八百ドルの「インタビュー料」をとるまでになるが、これがその「災難」の皮切りだった。

× × ×

ワシントン・ポスト紙と並ぶ有力紙ニューヨーク・タイムス紙は、「地元紙」ポストの特ダネの前に完全に出遅れた。十八日付ニューヨーク・タイムス紙の朝刊には、第五十ページ、右下のすみの方に小さく一段でAP電の簡単な記事がのっているにすぎない。

この日のニューヨーク・タイムス紙の一面トップは「マクガバン優勢」と、二日後に迫ったニューヨーク州予備選挙の見通しを伝えていた。下の方にはミュージカル「屋根の上のバイオリンひき」が三千二百二十五回というブロードウエーでの連続公演に新記録を立てた大きな記事。そして二面には「サトウ、最後の会見で記者団と衝突」

ウォーターゲート事件が起こる数時間前、日本時間十七日午後零時半(ワシントン時間十六日午後十一時半)から開かれたテレビ記者会見で、佐藤首相は苦境に立っていた。引退の心境を国民の前に明らかにする、在任最後の記者会見だというのに、連絡の手ちがいから、「新聞記者は出てください。テレビにだけ話をする」というけんか別れに終わってしまったのだ。

佐藤内閣と、それに批判を高めてきた新聞との離別の場であった。しかし、もちろん佐藤首相も、一年後、ニクソン政権がウォーターゲート事件をめぐって決定的に報道陣と対立したあげく、大統領自ら記者室に陳謝に出向くなどという事態が、海のかなたで起こるとは予想もしていなかった。

「佐藤退陣、新風待つ政局

自民総裁選、いよいよ激化」

十八日付朝日新聞の一面トップの見出しであった。ウォーターゲート事件が紙面に初めて登場するのはその二日後になる。

絶頂から谷底へ

ニクソン大統領は、フロリダ州キービスケーンの別荘で、久びさにのんびりした週末を楽しんでいた。ほんの二週間前「寒い国から帰ってきた男」にとって、フロリダの太陽と、毛穴をじんわりと開いてくれるような生ぬるい海の空気は、なにより神経を休める。大統領はこの六月一日、米ソ首脳会談を成功のうちに終えて、モスクワ訪問の旅から帰ってきたばかりなのだ。

帰国したとき、大統領は空港でこう演説した。

「後世の史家に、米国は一九七二年に頂上にまで登りつめ、その後再び谷間に落ちこんだと書かしめないようにしようではないか」

大統領は得意の絶頂にあった。この年二月、中国で毛沢東、周恩来と会談、米中交流の道を開き、次いで五月のソ連訪問で、アメリカ、ソ連、中国、三極対立の空気は一気にやわらいだ。「後世に残る大統領」としての評価は、この二つの仕事で、ほとんど確立したも同然だと、ニクソン大統領は考えていたにちがいない。

もちろん、この日の事件がきっかけで、大統領の人気が谷底に落ち「辞任か罷免か」が全米で取り沙汰される日が一年足らずしてくるとは、大統領は予感していない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com